

中国幽鬼の世界

鬼趣談義

澤田瑞穂



中公文庫



中公文庫

きしゆだんぎ 鬼趣談義
ちゆうごくゆうき 中国幽鬼の世界

定価はカバーに表示してあります。

1998年8月3日印刷

1998年8月18日発行

著者 さわだ みずほ 澤田瑞穂

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Mizuho Sawada

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203215-6 C1198

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

鬼 趣 談 義

中国幽鬼の世界

澤田 瑞穂



中央公論社

目次

鬼趣談義

9

墓中育兒譚

50

亡靈嫉妬の事

75

髪梳き幽霊

96

鬼卜——亡霊の助言によつて吉凶を占う事——

111

再説・借屍還魂

124

鬼求代

153

鬼索債

178

泡と蝦蟇

204

石の妖怪

土偶妖異記

芭蕉の葉と美女

あとがき

修訂版後語

解説

書名索引

事項索引

稲畑耕一郎

494 485 470 468 465 458 434 395

関羽に扮して亡霊の訴えを聞く話

柩の宿

鬼買棺異聞

産婆・狐・幽霊

墓畔の楽人

鬼市考

偽幽霊出現

僵尸変

棺蓋鬼話

早魃とミイラ

野ざらし物語

378 349 331 298 286 269 254 233 226 222 217

鬼趣談義

——中国幽鬼の世界——

鬼趣談義

引言

仏教用語で、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上、これを総称して五趣または五道という。あるいは畜生の次に阿修羅あしゅらすなわち修羅道を加えて六趣または六道ともいう。「趣」とは輪廻の理によって衆生がそれぞれ趣おしむくところの意で、場所のことだから、興趣とか趣味とかの気分の意味ではない。従って、鬼趣も幽鬼の住む世界すなわち冥界のことで、背中がゾクゾクするような怪談的気分をいうものではなかったが、一般には鬼趣汪溢などといって、もっぱら怪奇なムードの意に用いられているようである。

これはこの世のことならず。なにぶんにも、話に聞いたことはあっても、実際には誰も見たことのない幽冥界のことだから、どうなっていることや、幽鬼はどんな形をし、どんな生活をしているのか、各人各説、虚伝臆造、すべて実証に乏しい話ばかり。これを具体的に述べよといわれても閉口するが、それでも世には熱心な好事家があって、幽霊を見たの化物に出遇ったのといって、その体験を語る人も絶えず、無数の遇鬼談が古今の文献

に書き留められている。古き晋の世の干宝かんぼうなどはさて措き、宋代の洪容斎先生をはじめ、近世では蒲留仙・袁随園・紀曉嵐・俞曲園などの筆まめな諸先生が、みな孜々ししとしてその見聞を記して今日のわれらに嘉恵せられている。近人でも周知堂先生のごとき、随時に説鬼の随筆を物して「進歩派」の人士から反動呼ばわりを受けられた。また中国民俗学の研究家中にも、張清水氏の「談鬼」(『民俗』第六十八期)や葉鏡銘氏の「鬼話」(『民間月刊』第五・六期)などの専論もあつて、民衆の幽鬼観を一覧するには簡便であるが、その伝承の地域も、もとづくところの資料も明らかならず、いささか心許もとないところがある。また記録された昔話集にも、林蘭編『鬼的故事』や朱雨尊編『民間神話全集』(その中の鬼怪神話)などの専集もあるが、昔話はどうしても興味本位に誇張されやすいので、資料としては一長一短である。そこで、手元の資料を雜綴して幽鬼の形状・姿態・行動・技能その他について諸説を概観する。ただし、事の真偽実否については保証の限りでない。

幽霊の形状と姿態

頭のない幽霊 幽霊の怖しさの中心はその相貌にあるはずだが、頭部のない幽霊も出た。山東兗州の王鑑おうかんという鬼神を信じない剛氣な男、唐の開元年間に、酒の酔に乗じて城外を馬でゆく。日没ごろ、林のあたりで一婦人が彼に行先を尋ね、一個の包みを託して、ふ

と姿を消した。このおれを愚弄するのかと、また馬に鞭をあてて進む。十余人が集まって焚火を囲むのに遇った。寒いし日も暮れたので、馬から下りてそこへゆき、先刻の幽霊女のことを話しかけたが、誰も返答をするものがない。よく見ると、火に向っている人の半ばは頭がなく、頭のあるものはみな面衣めんいを着けていたので、彼は驚いて馬で馳せ去った（『太平広記』卷三三〇引『靈異集』、一作『靈怪集』）。

面衣とは女子が外出時に面を蔽うために着けるベールのような布片であるが、男子もこれを用いることがあった。次のも右によく似た話である。

陸全慶りくぜんけいというものの、冬の晩に旅行する。従者は荷物を持って先行し、彼は馬でゆっくりと後からゆく。ひどく寒い。おりしも幽霊の群が焚火を囲んで坐する。彼は人間だと思つて馬から下りて火にあたる。火は勢よく燃えているのに少しもあたたか暖くない。火がなぜ冷いかと問いかけると、みな俯うつむいて笑うだけで、返事をしない。彼が振り向いてみると、悉く面衣を着けている。驚いて馬で逃げ、無事であった。附近の人の話では、そこには化物が出て祟たたりをなし、これに遇うもの多くは死ぬと（同書卷三二八引『御史台記』）。

江西宜黄ぎこう県の理髪職人で楊五三というものの、冬の夜にある屋敷の婚礼から酒に酔うて帰る。提燈ちようちんの火も消え、路が真暗なのでビクビクもので兵馬司の前を通りかかると、門外に群卒が焚火にあたっている。急いでいって自分も手をかざす。仰向あぐびいて欠伸をした途端

に見廻すと、群卒みな頭がない。驚いて逃げ、またも闇の中をゆくと、腸詰め荷を担いだ人が来るのに出遇った。荷には燈火がある。喜んでそこへいつて先刻見たことを告げ、消えた提燈に火を借りて点ける。見ると、その人もまた頭がない。驚いて地に倒れ、暫くして気がついて家に逃げ帰った。衣服も裂け、顔も傷だらけ。やっと化物のことを語っただけで、三日後に死んだ（宋・洪邁『夷堅志』三志壬卷四「楊五三鬼」）。

江蘇無錫むじやく県北門外の大橋は死刑場であった。道光年中に七十余歳になる顧姓の老人、夜更けに燈を点けて大橋を通りかかると、橋上に陰風が吹き起り、燈が消え、数十の頭のな亡者が追いかけてくる。びっくりして橋を渡り、ある店を背にして立つ。追ってきた亡者を見ると、それぞれ手には頭を提さげており、老人に向つてニタリと笑った。老人は氣絶して倒れた（清・薛福成『庸盦筆記』卷六「鬼欺衰老」）。

刑場だったから斬首された亡者が頭を手にして出たのである。笑つたのはむろん顔の部分であらう。

顎のない幽霊 口から下の顎あごのない幽霊、これを無顔鬼むがいといった。機織職人はたおりの某、道具を背負つて月明の下を帰る。一人がやってきて、この地は化物が多く出るそうで、わたしは臆病だから、連れになってほしいと頼む。承知して同行する。もし化物を見つけたらど

うしますと、その人が問う。機はたの軸で打つし、腰には鎌を持ってゐるから、それで殺すと答えた。その人はビクビクものでついてくる。うしろから呼びかけた、「幽霊は顎がないというが、ためしにわしの顔を見なされ」と。さては幽霊かと、鎌を揮って振り向くと、顎と胸と接しており、両眼は眈々たんたんと睨む。やがて姿を消した（宋・洪邁『夷堅志』乙志卷八「無類鬼」）。

遊びずきの連中十数名が、宛平えんぺい県城外の墓地に鶉うずらを取りにゆき、夜は宿に集まって酒を飲み怪談に耽たかる。「幽霊には顎がないと伝えるけれど、つまりは嘘だ」と一人が言い出すと、また一人が「我々の中で顎のないのがおれば、それが幽霊だ」といって、ふざけ半分に手で座中のものの顔にさわる。中の一人、背を向けて忍び笑いをしていたのが、どうしてもさわらせない。無理にさわろうとすると、突然こちらを向いた。燈のそばで、みなが近寄ってよく見ると、唇から下がなく、子供の面具そっくりであった。みな思わず仰天して走り出し、門外でバタバタと倒れた。それでも幽霊の叫び声がする。村人が集まって見ると、折り重なって倒れており、その下から声がする。燭で照らしてみると、それは幽霊ではなく、一匹の番犬であった（清・長白浩歌子『蜚窓異草』三編卷四「鬼無類」）。

鼻欠け幽霊

鼻の欠けた幽霊女の話があった。張奇齡という男が、酒に酔って日暮に城

西の井氏の墓地を通りかかる。墓の上にはそれぞれ人がいて見張っている。その墓の一つに、人が背を向けて立つ。彼が通り過ぎるのを見て背後から追ってくる。振り返ると、それは鼻のない若い女であった。彼は地に倒れ、口中が土だらけになった。あとで聞くに、井氏には以前に若妻があつたが、梅毒で鼻がやられて死んだと（山東泰安府『東阿県志』卷二十四）。

ノッペラボウ 鼻欠けどころか、目も口もないノッペラボウの幽霊も出た。北京西安門内の西十庫で兵卒たち十余人が当直をする。酒を飲んでみなかなか酔った。二更の後、一人が立って小便に出る。月光の下、紅の衣服の女が塀ぎわに蹲しゃがんで小便でもしているらしい。彼は酔っていたから悪戯いたずらごころを起し、そつと抱きついた。女が振り向いた。それは眉も目も鼻も口もなく、まるで豆腐のようにノッペリとした白い顔であつた。彼は氣絶した（清・和邦額『夜譚随録』卷二「紅衣婦人」）。

日本にも東京は赤坂見附の有名な怪談があつた。雨のそぼ降る晩に、弁慶橋べんけいばしの欄干たすに佇む女の影、身投げかと抱きとめると、振り向いた顔はノッペラボウ。男驚いて逃げ、夜泣き蕎麦そばの行燈あんどんを見つけて跳びこみ、先刻の怪異を話すと、こちらを向いたその蕎麦屋の顔も、同じようにノッペラボウだったというので、二重の意外を誘う怪談になっている。ど

この国でも、思いつくことは似たようなものらしい。

幽霊に足あり 幽霊には足がないとは日本では通説のようになっているが、これは怪しい。墓場の破れ提燈ちようちんから亡霊が抜け出し、裾の方は細く煙のようになっていいるから、近世の画家や講釈師や芝居者が、そういうことにしてしまったのではないか。

随園先生ずいえんの記すところによると、寧波ニンポウの周秀才の語るところでは、幽霊には足があるばかりか、幽霊女の足はとても香かぐわしいと。この周秀才、月下にある幽霊女と出遇でうごつて相交わる。女のいうには、冥籍めいせきの帳簿によれば、あなたとは一百十六回の交媾こうごうができることになっている。もし他人に気づかれなければ同棲できるが、さもなければ縁が尽きて別れることになる。またいう、わたしには人間の女と同様に月経もあって受胎もできるが、あなたは子のできない運命だから後嗣あとつぎをつくることはできないと。これより彼はいいよい焦しやう悴すいし、同輩に知られてしまったので郷里に帰ったところ、身体は漸ようやく肥えはじめた。彼は幽霊と交わるたびに曆書こよみの月日の下に朱で丸じるしをしておいた。あとで同輩が数えてみると一百十六個の丸じるしがあったと（清・袁枚『統子不語』卷三「鬼脚甚香能行經受胎」）。かりに一夜一交とすれば、一百十六交は約四ヶ月を要する。月経もあるというから、その時はどうしたのか、などと詮索するのは愚の骨頂。まじめくさって人をかつぐことの好